
とある侍の最強物語

クラリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある侍の最強物語

【Nコード】

N4186Z

【作者名】

クラリス

【あらすじ】

スペディオだったものです！携帯がぶっ壊れてしまい、新規登録しざる負えなくなっていました。

すみません！せっかくお気に入りしてくださった方々がいたのに・・・
・申し訳ないです。

一応「とある侍の一方通行」を改良したものです。

書き直したので全然違うものになってますが、ぼちぼちと進めていくので、どうかよろしくお願いいたします。

1、与えられた世界（前書き）

設定違ってます。

1、与えられた世界

(痛エ・・・あれ?どうしてこうなったんだっけ?)

意識が朦朧の中、男は考えていると、近くで見知った顔が複数近づいて叫んでいる。

(ああ・・・そうか。俺はこいつらを守るためにやられたのか)

自身で納得して体を見る。心臓付近に深く刺さった刀がそこにはあった。

もう直々持たなくなるだろうと察するが、どうにも駆け寄ってきた仲間達に送る言葉が出ない。

(ははっ・・・これでいい。俺がどうなるうと、こいつらが生きてればそれだけで十分だ)

なんて自分勝手だろうと思つと自然に笑えてきた。

(ごめんな。もう一緒にいてやれなくて・・・)

そして、限界はコクコクと近付いていき、目を閉じていくその度に周りをもっと騒がしくなる。

男はそれを感じながらも思いぴたり、そして

(お前らと出会って俺は)

(幸せだったよ)

優しく笑って意識を手放した。

「・・・・・・・・」

研究所で設けられた部屋に一人の少年がソファから起き上がる。

「随分とまア懐かしい夢見たな」

頭をガシガシを搔いてゆつくりと立ち上がる。

その髪の色は白で、目の瞳はルビーのように赤い。

はぁ、とため息を吐いて自室にある冷蔵庫の方へと向かう。
何か食べ物がないかと開けてみると

「コーヒーしか入ってねエ・・・・・・・・」

ズラリと並べられた缶コーヒーしかなかった。

「ここまでカフェイン中毒になるたア思ってたね」

自分自身が呆れるほどの中毒患者なのだ。しかもブラックで早死に

しそうなほどの量を今まで飲んできた。

「ベクトル操作・・・か。自分で言うのもあれだが、改めてチートだと思うわ」

それは彼が持つ異能の力。この世界の科学によって生まれた力なのだ。

ちなみに彼の力は、重力や圧力、それに熱量や風力などあらゆるものの向きを変える事ができる最強とも言える力。

更に彼は”学園都市序列第1位”の称号を数年前に得ている。

能力者の中で一番上である七人しかいない超能力者（レベル5）。その頂点に立つのが一方通行アケセラレータと呼ばれる存在、それがこの少年。

「つうか、いつ見ても細いな俺」

ちゃんと筋トレしてんのに・・・とブツブツと呟く。

彼の容姿はそれほど高くはない身長にスラッとした女のような体型。自身が言う筋トレで少しも肉がついているようには見えない。

「これも能力のせいかな？いいんだか悪いんだか、わかったモンじゃねエな」

特に気にしてる訳でもなく、怠そつにため息をつく。

それに何ともなしに携帯を開くと時間は昼前になっていた。

「・・・飯食いにでも行くか」

いつもと同じ何にも変わらない行動を開始する。

掛けてあつた木刀を持ち、ガチャッと扉を開けて部屋から廊下へと出て行き、目的地に向かつて外出するため歩く。

「あら。これからお決まりの外出？」

ふと、後ろから声がかげられる。振り向くと、白衣に少し短めの黒髪で色気がなさそうな女性。

「まアそんなとこだ。オマエはちゃんと仕事してンだろオな？ 芳川？」

芳川と呼ばれた女性は相変わらずの一方通行の態度に苦笑する。

「ちゃんとしてるからこそバレないんじゃない。いつも適当にこなしてる貴方が真面目にこの実験をあの子達のために働いているんだから。まったく、こつちの身にもなってほしいわ」

愚痴をこぼしながら尚もクスクスと笑っている彼女に申し訳なさそうにする訳でもなく適当に返す。

「当たり前だろオが。そオしてもらわないと困るからな」

ニヤリと凶悪な顔を浮かべて芳川を見る。

「本当にそこんとはあの人に似てるわね・・・まっ貴方の担当だったから仕方ないのかしらね」

芳川は彼をここまで育ててきた人物を思い浮かべて納得していると、うるせエよと返ってきた。

「精々、他の連中にバレないよオに頼むな？」

「ええ。わかっているわよ」

一方通行は更に念を打って芳川を見る。それにコクリと頷いて逆方向へと歩いていった。

その消えていく彼女を見つめながら面倒くさそうに顔を歪める。

「めんどオな配役だよなア、俺ア」

自分の立場を改めて実感して自嘲気味に笑って歩き始めた。

「どこもクソつたねな世界しかないのかねエ」

前世の記憶を持っていて、この世界と比べてどっちも同じだと実感する。

「まっどオでもイイか」

ハッと笑う。

「俺は俺が決めた人生をただ真っ直ぐ進んでいくだけだ」

「魂が折れねエよオにしつかりとな」

自分はこれでいいと信念を貫くために一歩ずつ前に進む。

時期は7月19日。学生達が待ち望む夏休みが来るそんな時期に彼の物語は始まるうとしていた。

1、与えられた世界（後書き）

次はヒロイン候補？が現れる予定です。

2、原子崩し（前書き）

一応題名通りの人物達が登場します。

2、原子崩し

自室ではあとため息を漏らす少女がいた。

その原因はわかっていた。だからか、最近仕事がまともにできなくなってしまった。

絶対的な力によって。

そして余りにも真っ直ぐで、曲がらないその存在に心を奪われてしまった。

(どうかしてるわ私・・・)

そんな自分に呆れてしまっていたのだ。

とある路地裏で事件は起きていた。

とてつもない爆発がその場の風景を襲う。

周りには様々醜くなった死体。逃げる人間と、それを追いかける人間。

まさに気が狂うほど狂気に満ちた場所と化していた。

少女は逃げる男を面白くなさそうに見て、能力を放った。原子崩し

(メルトダウン)。正式には粒機波形高速砲。

七人しかいない超能力者の一人が彼女だ。

固定された電子を男に高速で放つと体が吹き飛び、あっけなく絶命した。

(まったくもってつまらない任務だわ)

ぐちゃりと死体を踏み潰しながら歩く。彼女は暗部に属する裏側の人間であり、こういう事はいつも通りの日常なのだ。

少女は任務終了の電話を入れようと携帯を開く。その矢先だった。

コツッと誰かが近付いてくる足音が聞こえるのが確認できた。

音がする方へと視線を映す。

「うっわア、こんな道何で来たんだろオナ？俺ア」

周りの死体にも気にせずになるそうに歩く白い人間。

少女は驚いた。彼女が資料を見た人物と一致していた。

「一方通行……………」

「おオ？俺を知ってるのか。俺はあんたを知らねエけど」

名前を知られていても興味なさそうに頭掻いて面倒臭そうに答える。それに対して相当イライラしたが、我慢する。

「三下には興味ないってか？一応同じ超能力者なんだけど。聞いた事ない？原子崩しって」

同じ超能力者と聞いて頭を捻らせた後、じつくり顔を見てから思い出す。

「そオカ……………オマエが第四位の麦野沈利……………」

「そうよ」

正解と言わん顔で笑う麦野はヒュン、と高速で電子を一方通行へと放つ。

しかし、いとも簡単に避けられた。

「あつぶねエな、オイ。いきなり何すンですかア？カルシウム足りてんの？」

少し驚いたが、それだけだった。また面倒臭そうな顔をして麦野を見る。

肝心な彼女はあんな華奢な体で身体能力が高いか疑問に思う。

資料には能力が全般に纏められていたが、彼に至っては身体能力も優れている事も書かれていた。

一発避けられただけでは判断できないと思ってまた仕掛けようとするが、いつの間にか殺した奴らの仲間が一斉に現れて二人を囲んだ。

麦野はよほど一方通行にしか集中していなかったのだろう。油断した、と愚痴をこぼした。

「ねえ。あんたが来なきゃ直ぐに帰れたんだから、これ、何とかしてよ?」

麦野の無責任な態度に一方通行は

「なんで俺が後始末しなきゃいけないんだよ」

正論を述べた。

だが、相手は待ってくれない。敵は一斉に襲い掛かってくる。

「頑張つてにゃーん」

いつのまにかすり抜けていたのか輪の外にいた。

(ふざけんなアああああ!!あのクソアマ、まじで丸投げしやがった!)

麦野に怒りを感じながらも、持っていた木刀で立ち向かう。

「クソつたれ共オオオおおお!!恨むンなら、第四位になア!!」

能力を使わずに木刀と身体能力だけで突っ込む。

麦野は外は漸く一方通行の実力に納得した。

そして余りにも魅力的だと思った。

敵陣に一人で立ち向かうその白髪の姿は、まさしく夜叉そのもの。何十ものいた連中はあつというまに地に伏せた。

「つたく、余計な重労働させやがって」

木刀を降ろして外れの方で見ていた麦野を睨む。

「思ってたよりすごいわねえ。あんた、私んここで働かない？」

麦野は笑いながら流して、勧誘を始めた。

それには尚更歪める一方通行。

「暗部組織にいるンだったか？……俺は誰の駒になる気はないね」
勧誘をあつさり否定した。

「俺は俺が決めた道しか進まねエ事にしたンでな」

その言葉に麦野は苛立つ。

「私より上のやつが、自由にできると思ってたんのか？」

そんな事は絶対無理だと断言する。そういう風にできてしまっていると麦野は実感していた。

「そんなン、テメエが決める事じゃねエだろ」

一方通行も麦野を見てそれを気づいている。

「もし暗部に堕ちたとしてもよ、自分の意志テメエさえしっかりしてりゃ

あ、どオにかなんだよ」

表情は無表情で麦野に背を向ける。

「暗部だからって別にテメエのやりたいよオにやりやあイイじゃねエか。殺したいなら殺せ、殺したくないなら殺すな。それを決めんのは他の誰でもねエ」

「自分で決める事だ」

それを聞いて少し顔を下に向ける。

「殺したくないとか、そんな勝手なことできるわけないじゃない…」

絶対に無理であって、それを暗部としての意味がないと、勝手に思い込んでしまっている。

「それさえありゃ十分じゃねエか。俺もこんなどこ見ちまったし、何かあつたら助けてやるよ」

それを聞いた麦野は一方通行のいる場所を見たが、そこにはもういなかった。

「どうやって助けに来るのよ………」

残された麦野はただ呟くしかなかった。

そして現在に至る。

あれから殺す事が余りできなかつた。殺す事に恐れるようになった

のかまだ麦野はわかっていない。

「自分の意志ってやつなのか？」

ベッドに横になりながら考えながら目を閉じる。

「一方通行……か」

あの時に現れた白髪を思い出してそっと呟いた。

2、原子崩し（後書き）

超電磁砲は次に出ます。

3、幻想殺し、超電磁砲そして……（前書き）

やっと出てきます。麦のんは個人的に好きなので、最初に出しました。

3、幻想殺し、超電磁砲そして……

7月19日。いつものように適当にぶらついて結構な時間が立った。

夏だからか、6時にはまだ少し明るい。

学生達も様々な行動をとったりと、人が溢れかえっていた。

その中に一方通行はいた。

「相変わらずに、わらわらいますねェ」

そんな様子を横目で見ながら歩く。

「そろそろ飯食って帰るか」

そしていつものようにファミレスを見つけてそこに入る。

元気の良い店員の声とともに中に行くと、見覚えのある制服を来た茶髪が座っていた。

そこでピタッと止まった。

(……………何でこんなところにいるんだよ……………)

一方通行は誰なのか確信して近付く。

そこにいる人物が想定外とは気付かずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4186z/>

とある侍の最強物語

2011年12月30日01時52分発行